

II-92

流域住民の自然原像と河川空間に関する住民意識との関係について

—福岡市室見川を例として—

九州大学大学院○学生員 山下 三平

九州大学大学院 学生員 元永 秀

九州大学工学部 正 員 坂本 紘二

九州大学工学部 正 員 平野 宗夫

1.はじめに 近年水辺空間の再生や親水機能を重視した河川空間の設計等が、さかんに議論され具体化されはじめている。このように親水機能を新しく位置づけ河川計画を策定する場合、水辺近くの住民の意識や要求を詳細に検討することが重要である。そこで本稿は、特に住民の過去の自然体験・イメージ（＝自然原像）と、現在住民が抱えている河川に対するイメージや期待及び河川空間の利用目的との関連に着目し、両者の関係を明らかにしようと試みるものである。

2.調査及び分析方法 調査はヒアリングとアンケートにより、二回実施した。調査対象は福岡市の西部を流れる2級河川室見川下流域住民とした。第一回目の調査（有効回答 103件）の集計結果は、住民の過去なれ親しんだ水辺と現在の室見川のイメージの比較と、現在の室見川の利用目的及び室見川に対する期待を、住民の属性の違いにもとづき比較することにより検討した。二回目は第一回調査の結果をさらに掘り下げて検討するために、調査項目を修正し、調査対象人数をふやして（有効回答 274件）実施し、数量化Ⅱ類を用いて分析した。

3.結果及びその考察 図-1は水辺に関する印象について、過去の水辺と現在の室見川を比較したものである。現在顕著に減少している項目は「自然が豊かなところ」、「水がきれい」及び「せせらぎ」等の河川独自の自然機能に関する印象である。逆に顕著に増加しているのは「いこいの場」、「散歩道」であり、変化は殆どみられないが相対的に度数が多いのは「子供の遊び場」

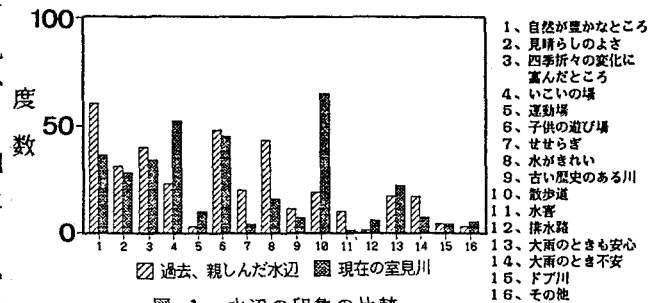


図-1 水辺の印象の比較

「四季折々の変化に富んだところ」及び「見晴らしのよさ」である。これらより現在の室見川は、自然的河川の印象よりも公園のイメージで流域住民に抱えられていることがうかがえる。

つぎに過去の水辺との関わり方が、現在身近にある河川の利用頻度、目的及び河川空間に対する期待に関する住民意識に与える影響について検討する。表-1は過去親しんだ水辺の利用頻度と水害体験の有無との関係について、第二回調査のデータを用い、数量化Ⅱ類で分析した結果である。これより、利用頻度が高いほど水害体験を有する傾向のあることがわかる。居住歴や年齢といった時間的指標を用いた場合、このような傾向はみられなかった。そこで、以下比較に際し、水害体験の有無を指標として用いることとする。図-2は過去親しんだ水辺に出かけた目的を比較したものである。ほぼ、どの項目も水害体験のある人の方がいない人より大きな割合を示す傾向のあることがわかる。図-3は現在の室見川に出かける目的の比較である。「景観を楽しむ」の項目で比較すると、水害体験のない人の方が、相対的に大きな割合を示す傾向のあることがわかる。図-4は今後の室見川に対する期待を比較したものである。ここでも「景観を楽しむ」の項目で水害体験のない人の方が、割合が

表-1 過去の水辺の利用頻度と水害体験の有無との関係（数量化Ⅱ類による）

過去の水辺の利用頻度	度数	ウェイト	レンジ
毎日	39	1.562	3.449
週2～3回	104	0.360	
月2～3回	85	-0.137	
年2～3回	34	-1.886	
ノーマーク	12	-1.886	

外的基準は水害体験の有無
 カテゴリーウェイトの符号が、
 プラスなら水害体験有りに、
 マイナスなら水害体験無しに、
 各々のカテゴリーが影響を与える

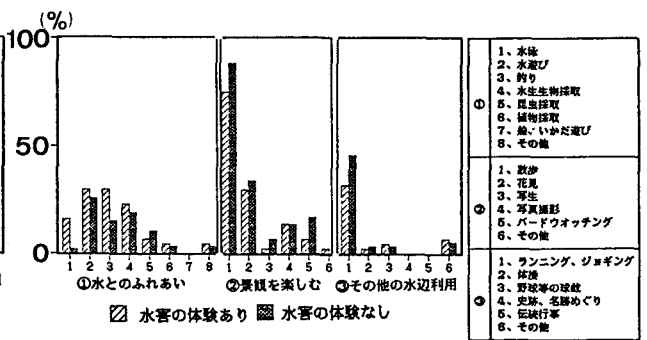
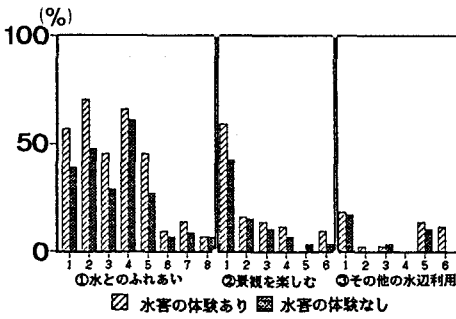


図-2 水辺の利用目的の比較（過去、親しんだ水辺） 図-3 水辺の利用目的の比較（現在の室見川）

大きくなっているのが特徴である。
表-2は第二回調査のデータを用い、
過去の水辺の利用目的と水害体験の
有無との関係を、数量化Ⅱ類により
分析した結果である。過去の各々の
利用目的で、「利用しなかった、わ
からない」のカテゴリー・ウェイト
がプラス、即ち「水害体験なし」に
影響を与えているものは、16項目中
10項目ある。残りは「利用した」の
カテゴリーが「水害体験なし」に影響を与えている。
この残りの項目は、「植物採集」を除いて、「水との
ふれあい」以外の項目である。この結果より、水害体
験のない人は河川の自然機能に関する利用については
消極的であり、整備され、目的の限定された河川敷公
園の利用については積極的であったことがわかる。

以上のことは水害体験も含めた過去の水辺への関わり
が密接な場合、住民は、河川に対して水辺独自の機
能を求める傾向のあることを示唆している。

4. おわりに 本稿では、住民が過去親しんだ水辺の
整備状況、イメージやそこでの体験の差異が、現在身
近にある水辺の利用目的や期待に与える影響を明示す
ることができた。今後は、ここで用いた指標「水害（
体験の有無）」という住民にとっては否定的な体験と、
親水性を重視した河川整備との関係とその意味につい
て検討して行こうと考えている。

謝辞： 調査にあたり福岡市早良区ならびに西区役
所土木農林部維持課公園係の方々にお世話になった。
深く感謝の意を表する次第である。

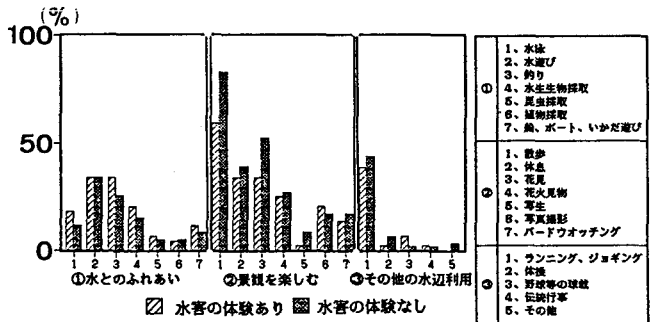


図-4 水辺の利用目的の比較（将来の室見川）

表-2 過去の水辺の利用目的と水害体験の
有無との関係（数量化Ⅱ類による）

過去の水辺の利用目的	度数	ウェイト	レンジ
1 水	177	-0.085	0.241
利用した	97	0.155	
利用しなかった、わからない	108	-0.059	
2 釣り	166	-0.038	0.098
利用した	156	-0.125	0.291
利用しなかった、わからない	118	0.166	
3 水生植物採取	90	-0.103	0.153
利用した	184	0.050	
利用しなかった、わからない	42	0.326	0.385
4 昆虫採取	232	-0.059	
利用した	39	-0.484	0.564
利用しなかった、わからない	235	0.080	
5 植物採取	197	-0.102	0.365
利用した	77	-0.262	
利用しなかった、わからない	72	0.174	0.236
6 花見	202	-0.062	
利用した	100	-0.220	0.347
利用しなかった、わからない	174	0.126	
7 散歩	70	-0.422	0.567
利用した	204	0.145	
利用しなかった、わからない	41	-0.127	0.149
8 花火	233	-0.022	
利用した	90	0.371	0.552
利用しなかった、わからない	184	-0.181	
9 写生	41	0.165	0.194
利用した	233	-0.029	
利用しなかった、わからない	31	-0.466	0.526
10 野球場等の建設	243	0.059	
利用した	13	0.649	0.582
利用しなかった、わからない	261	-0.032	
11 バードウォッチング	36	-1.775	2.043
利用した	238	0.268	
利用しなかった、わからない			

外的基準は水害体験の有無
カテゴリー・ウェイトの符号が、
プラスなら水害体験無しに、
マイナスなら水害体験有りに、
各々のカテゴリーが影響を与える